

# 別海町歴史文化遺産「在日米軍偵察機 RB-29 プロペラブレード」について

平成 26 年 4 月 別海町教育委員会生涯学習課

## 1. 物件の概要

本物件は、1954（昭和29）年に別海村上春別の民家に墜落した在日米軍偵察機RB-29のプロペラブレードである（写真1）。当時墜落した機体の処理を依頼された上春別の消防団が、昭和30年代初めに記念碑としてプロペラを屋外展示していたもので、現在の所在地は別海消防団第5分団上春別詰所の敷地内である。大きさは高さ246センチメートル（台座20センチメートルを含む）、最大幅36センチメートルである。



写真1 RB-29 プロペラブレード現況

## 2. RB-29墜落事件の経過

### (1) RB-29が別海村に墜落

1954年11月7日、米軍横田基地の第91戦術偵察大隊所属偵察機RB-29は、根室沖でソ連軍戦闘機より攻撃を受けた。乗組員12人は全員脱出したため、無人となった偵察機は制御を失って別海村上春別48線南45番地の涌田熊太郎氏の住宅付近に墜落した（写真2）。新築したばかりの住宅は、墜落した飛行機の翼部分によって基礎部分からえぐり取られて全壊した。これにより湧田一家は1年間鳥小屋での生活を余儀なくされることになったが、たまたま一家は留守だったために、けが人は出なかった。また絹見喜八氏所有の山林も被害を受けた。



写真2 RB-29 墜落現場

### (2) 米軍による発砲とフィルム押収事件

墜落現場には、計根別第4飛行場（西春別）に駐留していた米軍のジープがすぐに駆けつけ、地元警察や村役場に何の通知もなく、ロープを張って立ち入り禁止とし、人が近づいた時は空に向けて実弾発砲を行った。11月9日と10日に札幌調達局高木部長と中尾彰良別海村長らが現場を調査した際も、同様に発砲があった。12日、もう発砲はないので安心して調査をしてほしいとの連絡が、札幌調達局からは別海村にあった。しかし翌13日、被害状況の確認のために現場を撮影した役場職員も、空への実弾発砲による警告を受けるとともに、撮影したフィルムを米兵に取り上げられた。同月15日中尾彰良別

海村長自らが現場を撮影したところ、米兵より銃口を胸元に突きつけられ、フィルムを渡すよう要求された。中尾村長は抵抗したが、上官と交渉した方がよいとの同行した新聞記者の助言もあり、フィルムを渡した。



写真3 フィルムを返却される中尾村長

11月18日、アメリカ極軍空軍総参謀ローレンス大佐は墜落現場で中尾村長と会見し、「私の部下が日本の現在の事情を知らなかったためにご迷惑をおかけしたことに對し私はアメリカ極東空軍を代表して陳謝の意を表する」と謝罪し、押収した2本のフィルムを返却した(写真3)。ローレンス大佐の態度によっては告訴を提起する決意であった中尾村長も、「率直にわびるその態度」と「一兵卒の犯した失敗をはっきりとわびるその責任のある態度」に感動し、「日米親善のために何事も許すと決意」して握手し、フィルム問題については当事者間では解決した。

### (3) 補償問題

11月28日、中尾村長は上京し、米極東空軍本部でローレンス大佐に再び会見し、補償問題の交渉を行った。その際米軍側は、ソ連軍による攻撃により米軍の飛行機が墜落したのであるから、その罪はソ連側にあるために、今回の墜落事件による補償はできないと主張した。この主張に憤った中尾村長は猛烈に抗議し、強く再考を促した。ローレンス大佐はその熱意に負けた形で、見舞金として補償額に相当する額を出すことを約束した。

見舞金は7千ドル以内と決まり、当面日本政府が立替払いすることになり、総額の4割にあたる96万円を支出することが12月17日に閣議決定された。その後米軍が36万円を被害者に贈ることになったため、それを差し引いた60万円の支出が12月22日に再度閣議決定されている。

1955(昭和30)年9月に残金が支払われ、補償問題は一応の終結を見た。

## 3. RB-29記念碑建立の経緯

地元上春別の消防団は、墜落現場に散乱した機体の破片を村役場から依頼された。その中から比較的曲がっていなかったプロペラブレードを残し、その他の集められた破片は釧路のスクラップ買取業者に売却された。なおスクラップを売却して得たお金が元になり、数年後に消防会館が作られたという。記念碑の設置は業者に依頼して行われたが、その際プロペラに説明文と年月日なども記してもらったという。

後に現在のやぐらが建てられたこともあり、当初設置された場所から道路側に10メートルほど移動し、現在に至っている。

以上の経緯から、プロペラブレードの所有者は上春別消防団だと考えられる。

## 4. RB-29プロペラブレードの現況について

記念碑として設置されたときにプロペラブレードに書かれていた解説文が消えてしまったため、このプロペラがどうして現在地にあるのかが、一般の人にはわからない状況にある。また長年屋外に置かれていたことから、プロペラブレードに刻まれていたシリアルナンバーや、製造元であるハミルトン・ス

タンダード社のマークも薄れて判読できなくなっている。

#### 参考文献

- 『別海町百年史』(1978年)
- 芳賀信一『回想記その2 俺の青少年時代 新しい農村の夢におどる若者』(2013年)
- 楢山満夫『別海沿革誌 旅路 地域編』
- 中尾彰良『続村長後日物語』(北能新報社、1959年)※写真2、3出典
- 上春別郷土史編纂委員会『上春別四十年郷土の生いたち』(1972年)
- 「米軍機別海墜落から50年」『北海道新聞』2004年11月7日付(道東面)
- 「在日合衆国軍航空機事故による被害者救済について」(昭和29年12月21日)『公文類聚』第79編、昭和29年、第31巻(国立公文書館請求番号 本館-2A-010-08・類03989100。デジタルアーカイブ閲覧)

以下の方々に聞き取り調査を実施した。ここに記して感謝いたします。

芳賀信一、涌田光雄、坂脇堅一、細谷俊勝、有田喜八郎、佐藤嘉津三(順不同、敬称略)